

# 「日本六十余州国々切絵図」の地域史的考察

——下総国絵図を事例に——

白井哲哉

キーワード：地域史，国絵図，寛永10年，下総国，一国石高

## 1. 課題の設定

「日本六十余州国々切絵図」（以下「国々切絵図」と略称する，なお史料は「余洲」と表記）とは，現在，秋田県公文書館が所蔵する国絵図の一群の名称である。これは日本の旧国68カ国を1国ずつ1枚の絵図（備前国のみ2枚）に仕立てた計69枚の絵図で，もともと秋田県立図書館が所蔵していた史料という。しかし作成年代など不明な点が多いため，本格的に検討されることもなく，長らくその存在すらほとんど知られていなかった。

近年，川村博忠氏はこの「国々切絵図」に初めて本格的な検討を加えた（川村博忠 1995）。その結果，これが山口県文書館所蔵（毛利家文書）の「日本図」68枚と基本的に同じ図柄であること，熊本大学附属図書館（永青文庫）や東京大学総合図書館（南葵文庫）にも同種の絵図が何枚か残っていることを紹介された。そして記載内容等の分析から，これらの絵図が「寛永10年（1633）の幕府巡見使の国廻りに際して，巡見使を通じて収納された国絵図の縮写図である可能性がきわめて強い」との結論を導き出した。

寛永国絵図とは，江戸幕府がおこなった日本全国の国絵図作成・徴収事業のうち，慶長期に続く2度目の事業の成果物である。従来，江戸幕府の国絵図作成は，慶長10年（1605）頃，正保元～慶安元年（1644～1648）頃，元禄10～15年（1697～1702）頃，天保6～9年（1835～8）頃の4回が知られていたが，一方で岡山大学附属図書館（岡山藩池田家文庫）所蔵の備前国及び備中国絵図，国文学研究資料館史料館（徳島藩蜂須賀家文書）所蔵の阿波国絵図などが「寛永古図」と呼ばれており，当時の国絵図作成の可能性もまた指摘されていた。その寛永国絵図にはじめて本格的な検討を加えたのは他ならぬ川村氏であり（川村博忠 1982，同 1984a），黒田氏による批判（黒田日出男 1982）等を踏まえた近年における同氏の寛永国絵図理解は下記のとおりである（川村博忠 1990）。

① 寛永期における国絵図の徴収は，同10年（1633）と同15年（1638）の2回あった。

- ② 寛永10年の国絵図は、同年の諸国巡見使派遣に先だち巡見使から諸藩へ提出を求めたもので、同12～13年頃までに巡見使によって徴収された。このとき藩によっては慶長国絵図を写して提出した例もあった。
- ③ 寛永15年の国絵図は、「日本国中之惣絵図被仰下」のため、従来の国絵図の出来が粗略であった国の関係各藩に対して大目付から提出を求めたものである。このときは幕府が一定の作成基準を示したと思われ、特に交通関係記載が充実している。前述の備前国及び備中国絵図はこのときの作成にかかると思われる。
- ④ 正保国絵図の作成・徴収は正保元年（1644）に始まるが、寛永期の国絵図徴収はその前段として位置づけられる。言い換えれば、正保国絵図は「寛永期における一連の絵図事業の総決算的な事業であった」。

しかしながら、これまで寛永10年国絵図は原本及び写本ともに確認されていなかった。今回「国々切絵図」を検討した川村氏は、山口県文書館所蔵の絵図群の成立年代を元禄期頃と推定した上で、絵図の記載形式が慶長国絵図と方法国絵図の中間段階に位置すること、東京大学総合図書館所蔵の伯耆国絵図における領主名記載が寛永9～11年（1632～34）の時期に比定されること、等から、これらをすべて寛永10年国絵図の縮写本と判断したのである。

それにしても、日本全国の寛永国絵図が縮写本にせよ揃いで確認されるということは、単に地図史や近世国絵図の研究範囲にとどまらない意義がある。たとえば関東地方は一般に近世前期以前の史料の残存に乏しく、このことが当該期の地域史を考える上での著しい制約となっている。たとえ縮写本であっても当時の国絵図が確認されれば、それは各地の地域史研究に画期的な史料が提供されることを意味するのであり、自治体史編纂や各地域の博物館・資料館等の活動にも資する所は大きい。但しその際は、地域史の視点に基づく各絵図の史料批判が不可欠となるだろう。以上の問題意識から、本稿は「地域史的考察」と題して、「国々切絵図」の史料考察を深めることを目的とする。具体的には下総国絵図を事例に取り上げて諸本の比較を行い、新たに確認できた寛永10年国絵図等と併せて記載内容及び形式に関する若干の検討をおこなっていきたい。

なお、「国々切絵図」に対する私の検討作業は現在なお途上にあり、何らかの確たる結論に達しているわけではない。その意味で本稿はひとつの中間報告にすぎないことを御了承いただきたいと思う。また、川村氏が紹介した国絵図は各所蔵機関でさまざまな名称が付されているが、便宜上本稿では、検討対象の絵図の総称として秋田県公文書館における「日本六十余州国々切絵図」を採用した点、こちらも御了承いただきたい。

## 2. 記載内容と諸本の比較

まず、本稿で検討の対象とする下総国絵図を確認しよう。表1は各図の一覧で、各絵図の名

称は必ずしも原表題ではなく、後から各機関で付したのものもあると思われる。便宜上、以下では表1の備考に記した名称で各絵図を表記する。秋田本A及び山口本は川村氏の紹介にかかる絵図である。秋田本Bは私自身の調査によって確認したもので、関東8カ国分8枚が現存している。図1は秋田本A、図2は秋田本B、図3が山口本である。また参考のため図1のトレース図を図4に掲げた。各図は描き方にそれぞれ精粗があるが、少し眺めていれば3枚とも同じ構図で同様の記載内容をもつことが見て取れる。

次に、各図における特徴を川村氏に倣いまとめてみよう。

**地 勢** 基本的に国境線及び郡境線を明示しないで国内の地勢を描いている。川・海・池を

表1 「日本六十余州国々切絵図」下総国絵図一覧

	名 称	法量 (cm)	所 蔵・番 号	備 考
図1	日本六十余州国々切絵図 下総国	81.9×98.8	秋田県公文書館 A290-114-7	秋田本 A
図2	下総国 11 郡絵図	84.2×107.8	秋田県公文書館 県 C380	秋田本 B
図3	日本図 下総国	67.4×88.2	山口県文書館 五八-26-68-7	山口本

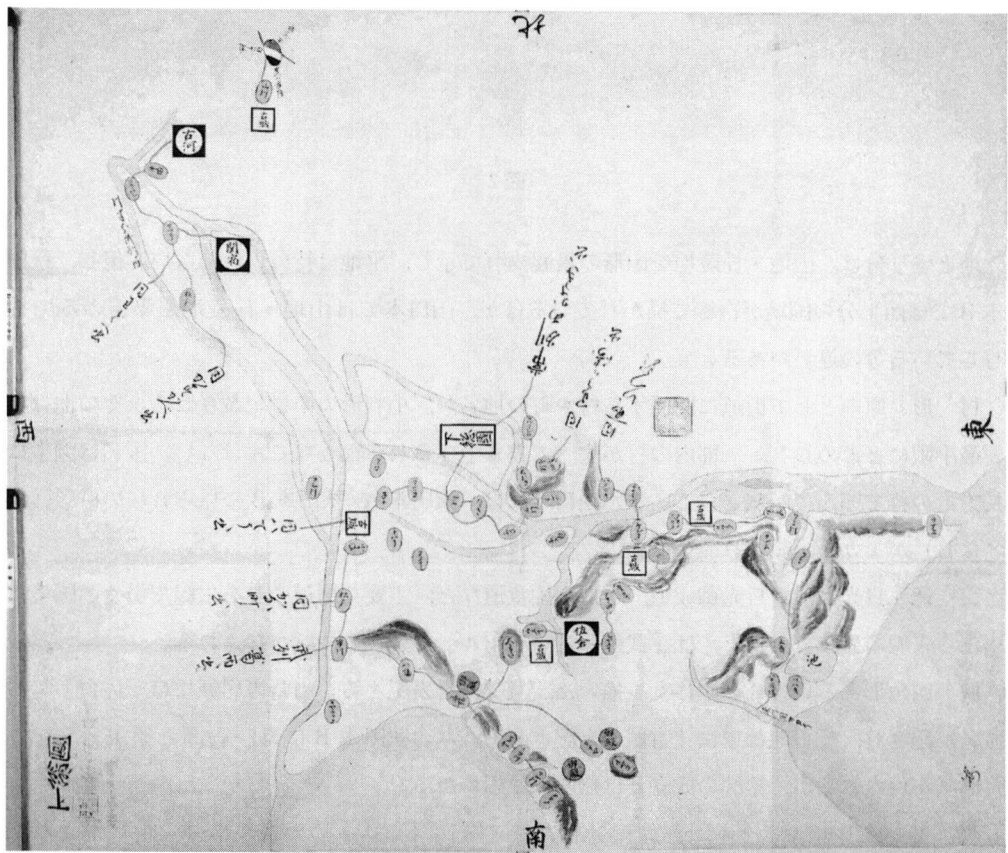


図1

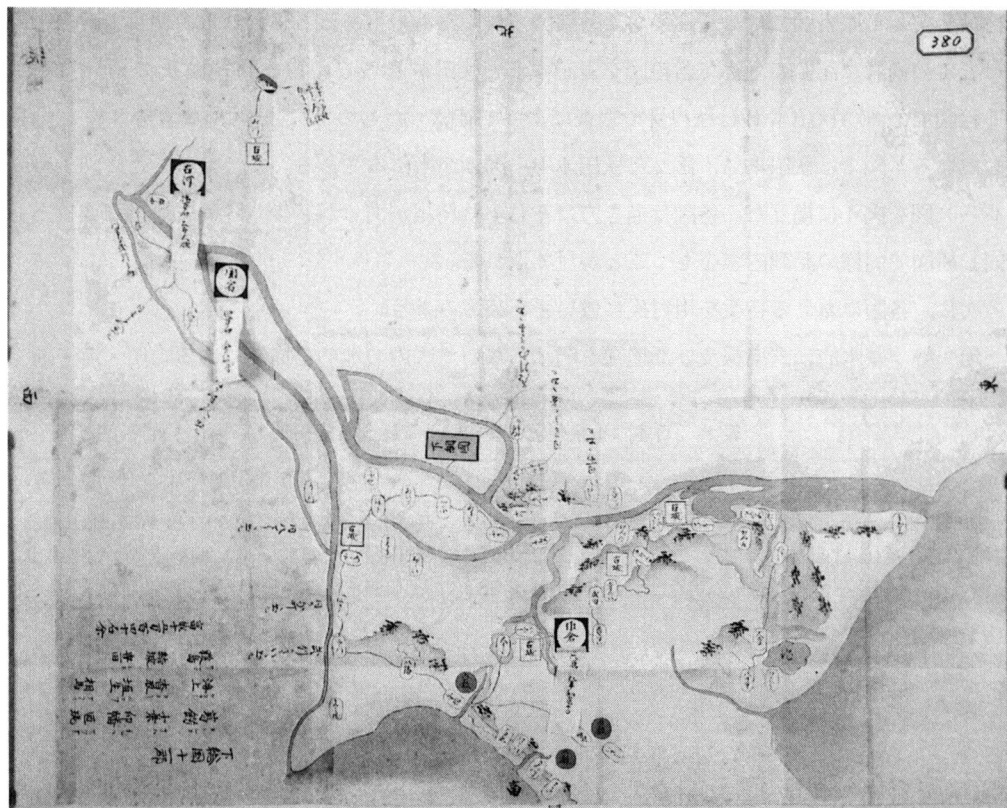


図2

陸地と塗り分け，山地・丘陵地を山形の景観描写で示し，平地は特に着色しない。但し，秋田本Bでは西半分の国境が白線で描かれているほか，山口本では山地・丘陵地を墨線のみで描写している等の違いがある。

**村形** 原則として街道に關係する村や町の地名が，小判形の中に記載される。その他は必要最小限にとどめられ，一郡内の村がすべて書き上げられるようなことはない。国名は図中に長方形の枠で囲んで記載される。また山口本には，秋田本A，秋田本Bに見られない村形（村名なし）が1カ所記載されている。

**交通** 日光街道，日光御成道，水戸・佐倉道など，主要な街道のみを朱線で引く。国境外へ出る朱線の先には，たとえば「武州かさいへ出ル」のように注記がなされる。

**城** 四角形あるいはその中に丸を描いた記号で城を表記する。当時の居城には「佐倉」等の城名が記され，その他は単に「古城」と記される。なお秋田本Bには，石高と領主名を記した貼紙が付されるが，絵図の成立とは無関係に思われる。

**裏書** 秋田本Aは「本印壺番」「六拾九枚之内」「下総国」の墨書があり，他に消された墨書の番号記載がある。秋田本Bは「七ノ仁」「三十三番」の朱書と「下総国」の墨書がある。

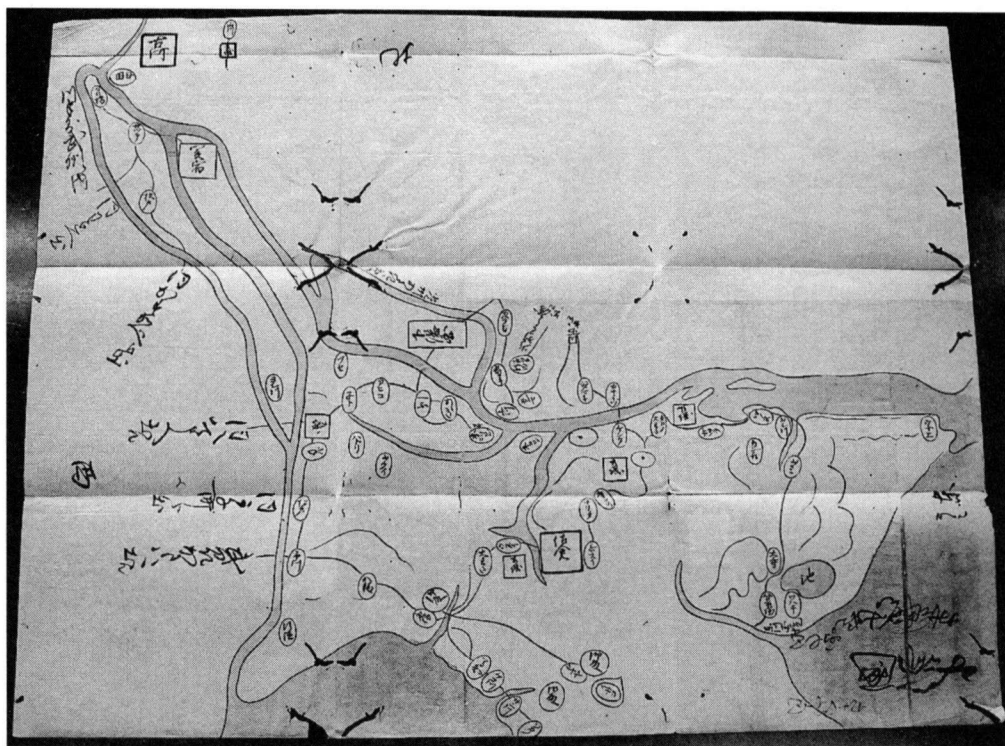


図3

山口本は、裏打ちされているので明瞭には見えないが「六十八枚之内」「東海道廿五ヶ国之内」「下総国」の墨書がある。

**その他** 図中に「御殿」の記載が3カ所見られる。方位は、東西南北を絵図の四方に記す。また秋田本 A と秋田本 B には、図の西北に隣国との関係を示す小判形の記号が記されるが、詳しい意味は不明である。さらに秋田本 B には、図の左下に郡名と一国石高が記載される。

絵図の記載内容のうち、地名について各図を比較した結果が表2で、表の番号は図4のトレース図中の番号に一致する。いくつかの地名で明らかな誤記を指摘でき、現地比定ができない地名もあるが、表記形式の違いを除けば記載内容は全く同じと言ってよい。また国境記載等について同じ比較をした結果が表3である。山口本が画面の一部を欠くため全記載について確認できないが、秋田本 A や秋田本 B で見られない国境記載が山口本には見られる。

さらに絵図の記載内容について考えていこう。

各絵図を一見して気がつくのは、栗橋、幸手、杉戸、吉川の地名が絵図の最も左側の河川とその右側の河川に挟まれた区域に記載されることである。位置関係から考えて、最も左側の河川は古利根川、その右側の河川は利根川（現江戸川）に比定できる。すなわちこの区域は、正保期以降においては武蔵国葛飾郡の一部として武蔵国絵図に描かれる部分なのである。

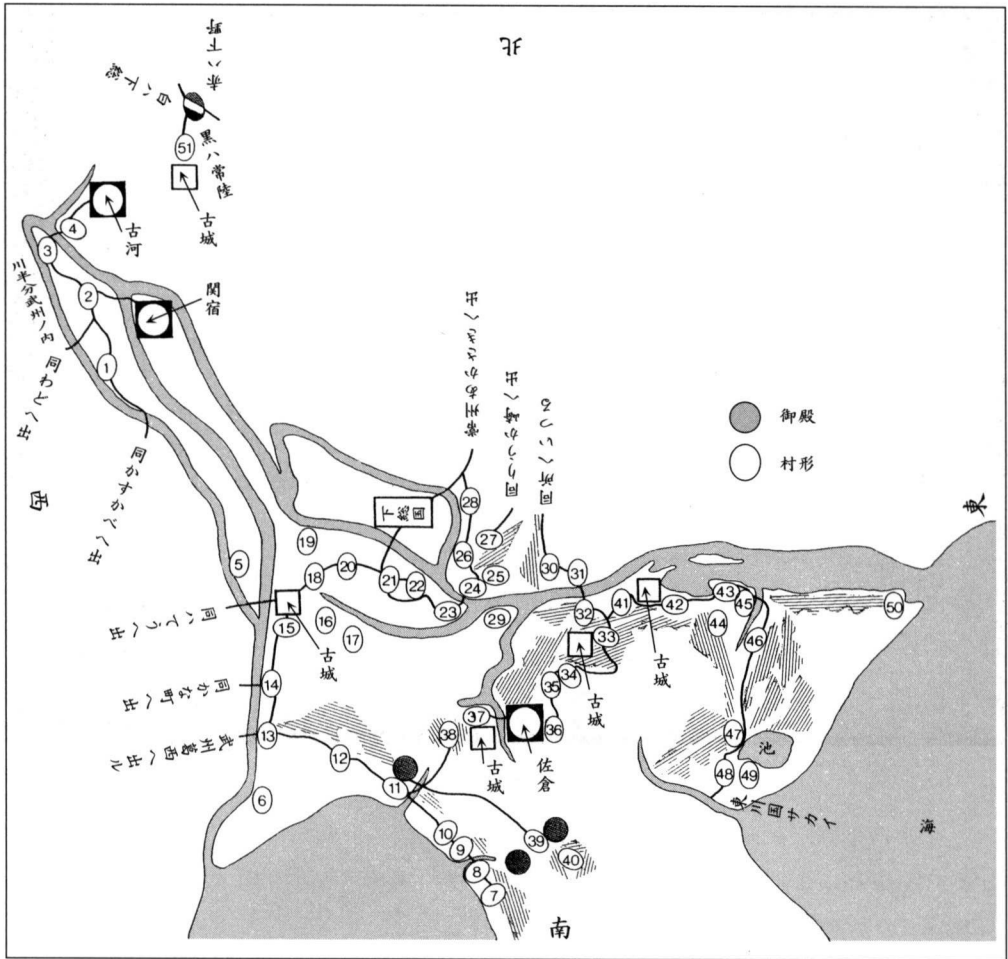


図 4

この区域が江戸時代初期に下総国の一部であったこと自体は旧知の事実で、たとえば「日本図」（明治大学図書館所蔵）や、かつて矢守一彦氏が紹介した寛文6年（1666）成立の「日本分形図」（神戸市立博物館所蔵）（矢守一彦 1977）は慶長日本図の写と言われるが、そこではこの区域が下総国の一部として明確に描かれている。さらに、この区域に残る検地帳の国郡名記載を表4から確認すると、寛永11年10月までは下総国猿島郡または葛飾郡と記されるが、同14年7月には武蔵国葛飾郡に編入されていることが明らかである。

次に河川の流路を確認すると、絵図では権現堂川、古利根川、利根川、渡良瀬川、常陸川（現利根川）、小貝川、鬼怒川、印旛沼と手賀沼が描かれており、正保国絵図にも描かれない赤堀川は当然に見られない。また、江戸時代初頭の小貝川と鬼怒川は、水海道（茨城県）付近で合流したのち東流して利根川に注いでいたが、幕府代官の伊奈忠治は寛永6年（1629）に鬼怒川流路の南側台地を開削して利根川に通じさせ、同時に水海道の合流点を堰き止めて両河川を

「日本六十余州国々切絵図」の地域史的考察

表2 下総国絵図における村名の諸本比較

番号	秋田本 A	秋田本 B	山 口 本	備 考
1	杉戸	杉戸	杉戸	杉戸
2	サツテ	さつて	サツテ	幸手
3	クリハシ	くり橋	クリ橋	栗橋
4	中田	中田	中田	中田
5	ヨシ川	よし川	ヨシ川	吉川
6	キヤウトク	きやう徳	行徳	行徳
7	ソカノ	そかの	ソカノ	蘇我野
8	サン川	さん川	サン川	寒川（三川）
9	ケコ川	けこ川	ケコ川	検見川の誤記
10	馬知	馬知	馬知	馬加（幕張）の誤記
11	舟橋	舟橋	舟橋	舟橋
12	八幡	八幡	八幡	八幡
13	市川	市川	市川	市川
14	松戸	松戸	松戸	松戸
15	小かね	小かね	小ね	小金
16	トハリ	とはり	ハトリ	戸張
17	ヲクイ	おくい	小クイ	（不明，小倉か）
18	子ト	称と	子ト	根戸
19	フセ	ふせ	フセ	布施
20	アヒコ	あひこ	アヒコ	我孫子
21	一ふ	一ふ	一フ	都部（一部）
22	あらき	あらき	あらき	新木
23	ふさ	ふさ	木オロシ	布佐，山口本は「フサ」と補記
24	ふ川	ふ川	ふ川	布川
25	モンマ	もんま	モンマ	文間
26	長おき	長おき	長オキ	長沖
27	なかおき新田	なかおき新田	ナカオキ新田	長沖新田
28	カワラシロ	かわらしろ	カハラシロ	河原代
29	木おろし	木おろし	木オロシ	木下
30	ハタマキ	はたまき	ハタマキ	片巻の誤記
31	カナイツ	かないづ	カナイツ	金江津
32	ケンタ	けんた	ケンタ	（不明）
33	〔ク〕	書付不見	〔ク〕	
34	寺タイ	寺たい	寺タイ	寺台
35	ナリ田	成田	ナリタ	成田
36	シヤスイ	しやすい	シヤスイ	酒々井
37	ウスイ	うすい	ウスイ	臼井
38	大わた	大わた	大ワタ	大和田
39	カナヤ	かなや	カナヤ	金井郷
40	イサコ	いさこ	イサコ	（不明，砂瀬か）
41	タカノ大ワタ	たかの大わた	タカノ大わた	大和田か
42	サワラ	さわら	サワラ	佐原
43	ツノ宮	ツの宮	ツノ宮	津宮
44	カン取	かん取	カン取	香取
45	ヲミ川	おミ川	おミ川	小見川
46	ヲミ	おミ	おミ	小見
47	大寺	大寺	大寺	大寺
48	八日市場	八日市	八日市場	八日市場
49	ツハキ	はき	ツハキ	樺
50	ウナ上	うな上	ウナ上	海上（柴崎か）
51	山川	山川	山川	山川

※〔 〕書きは，絵図が記載する記号をそのまま記したものの。

表 3 下総国絵図における国境記載等の諸本比較

秋田本 A	秋田本 B	山口本
武州葛西へ出ル	武州かさいへ出ル	武州かさいへ出ル
同かな町へ出	同かな町へ出ル	同か子町へ出
同八てうへ出	同八てうへ出ル	同八てうへ出
同かすかべへ出	同かすかへへ出ル	同かすかべ江出
同わどへ出	同わとへ出ル	同わとへ出
川半分武州ノ内 (記載なし)	川半分武州之内 (記載なし)	川半分武州ノ内
常州あかさきへ出	常州あかさ木へ出ル	常州あかさきへ出ル (欠)
同りうか崎へ出	同りうか崎へ出ル	常州りうか崎へ出ル
同所へいつる	同所へ出ル	同所出ル
東川国サカイ	(記載なし)	東川国境

表 4 武蔵国葛飾郡幸手領の初期検地帳表題

年代	村名	表題
慶長 20 (1615) 7 月	権現堂	下総国猿島郡幸手内権現堂村御検地帳
寛永 2 (1625) 11 月	高須賀	下総国下河辺庄勝鹿郡高須賀村検地帳
同 4 (1627) 10 月	権現堂	下総国猿島郡幸手ノ内権現道村御検地帳
同 4 (1627) 10 月	平須賀	下総国猿島郡幸手内平須賀村御検地帳
同 11 (1634) 10 月	宇和田新田	下総之国葛飾郡宇和田新田御抱地帳
同 14 (1637) 7 月	平須賀	武州幸手之内平須賀村御検地帳
同 14 (1637) 7 月	権現堂	武州幸手ノ内権現堂村御検地方書帳

※『幸手市史』近世資料編Ⅰ(1996)から作成。

分離させた(和泉清司 1982)。この点を絵図上で確認すると、やや不正確な形ではあるが、鬼怒川の新河道とおぼしき流路がはっきりと描かれている。ちなみに前述の「日本図」「日本分国図」において、両河川は合流したまま東流して利根川に注いでいる。

次に、絵図中の特別記載と言うべき「御殿」に注目しよう。この場合の「御殿」は徳川将軍が江戸城外へ赴いた際の休泊施設を指し、特に徳川家康が鷹狩等に際して「御殿」を各地に造営し実際に休泊したことから、従来よりその政治的・軍事的性格が指摘されている(丸山雍成 1989)。絵図に記載される「御殿」は、船橋御殿(慶長 17 年造営、寛文年間廃止)、千葉御殿(家康在世時造営)、東金御殿(慶長 18 年造営、寛文 11 年廃止)の 3 つである(森朋久 1993)。また、絵図には船橋御殿付近から東金御殿付近の金谷郷へ伸びる朱線が見えるが、これは徳川家康が慶長 18 年(1613)に鷹狩のためとして造営させた東金街道と思われる。但し、秋田本 A と秋田本 B ではこの朱線が「舟橋」の村形から伸びるのに対し、山口本では「御殿」から直接に伸びるという描写の違いがある。

街道に関わっては、水戸道の経路にも注目したい。現在の水戸道は我孫子から利根川を渡って取手に至り、さらに小貝川を渡る経路をとっており、絵図には取手を経由するはずの朱線も



描かれている。しかし絵図には寛文6年(1666)に成立する取手宿は記載されず、むしろ布佐・布川を通る朱線とその沿道の村々のほうが詳しく記されている。『取手市史』によれば、近世初期の水戸道は我孫子から東へ向かい、小貝川流域の低地を迂回して布佐から利根川を渡り、布川から河原代へと通っていて、現在の経路が成立するのは前述の鬼怒川・小貝川の河道改修以降であると言う。

さて、以上の検討により、3枚の下総国絵図が基本的には同じ国絵図の写本であり、その記載内容は慶長国絵図以降でかつ正保国絵図以前のものであることが確認できたと思う。しかも年代的には、寛永6年以後で同14年以前の時期に相当する内容であると言える。この時期に該当するのは寛永10年国絵図以外に知られていない。この限りにおいて川村氏の指摘は妥当性をもつと思われる。

### 3. 記載形式をめぐって

ここでいったん下総国絵図から離れ、2種類の寛永国絵図における記載形式の特徴についてもう少し詳しく検討することにしたい。

まず寛永15年国絵図について、川村氏の指摘する特徴をまとめておこう(川村博忠 1984, 同 1990)。

**地 勢** 国境線を明示しないで国内の地勢を描いている。川・海を陸地と塗り分け、山地・丘陵地を山形の景観描写で示して一色に塗り、平地は郡ごとに着色する。

**村 形** 小判形(但し形はやや不揃い)の中に村名と村高が記入される。備中国絵図の場合、岡山藩以外の領地には領主名も記入される。

**郡区別** 郡境は金泥色の線が引かれ、村形も郡ごとに色分けされる。郡名は、図中に長方形の枠を設けて、村数及び石高の集計とともに記される。

**交 通** 主要道を太朱線、その他の道を細朱線で描き、黒丸点で一里塚を表現する。、河川の渡河点や峠坂難所などに注記が見られ、海上交通についても舟路と海上里数を記入する。

それでは寛永10年国絵図はどうか。

最近私は、香川県の金刀比羅宮に「寛永拾年酉三月日」の年代記載をもつ讃岐国絵図が残されていることを確認した(高松市歴史資料館 1993)。いま原史料が未調査の段階で、写真版から読みとれる絵図の特徴を挙げると次の通りになる。

**地 勢** 国境線を明示しないで国内の地勢を描いている。池・海を陸地と塗り分け、山地・丘陵地を山形の景観描写で示し、平地は特に着色しない。

**村 形** やや円に近い小判形の中に村名を書き、その肩に郷名を付す場合が多い。本郷と枝郷は黄線で囲んで領域が示され、そこに郷単位の石高が記載される。領主名は記されない。

**郡区別** 郡境は紫線で引かれ、村形も郡ごとに色分けされる。郡名は絵図に直接書かれてい

ない。讃岐国絵図の場合、各郡の郡名と一郡石高及び田畑の訳を記した張紙が付されているが、これが当初からのものかどうかは不明である。

交 通 主要道を太朱線、その他の道を細朱線で描く。一里塚は見られない。海上交通について航路は記されるが距離等の注記はない。

さて、以上の特徴をもつ2枚の寛永国絵図と「国々切絵図」を比較してみると、現段階ではどちらかに一致するとは必ずしも言えない。これは慶長国絵図でも見られる絵図の記載内容の不統一が関わっていると思われる。たとえば先に掲げた下総国絵図には郡境線が引かれていないが、川村氏が紹介した安芸国絵図や図5の淡路国絵図（山口本）などには郡境線が引かれており、この類の不統一は他にもあるだろう。どちらかと言えば、平地を着色せず山地・丘陵地の景観描写が類似する点から、寛永10年国絵図のほうがやや近いだろうか。

ところで、前述のとおり、秋田本Bには一国石高と郡名の記載がある。実は、川村氏が紹介した熊本大学附属図書館所蔵の「国々切絵図」（熊本本と呼ぶ）にも一国石高と郡名が記載されている。写真が不鮮明なので判読できないが、「安芸国八郡高」と8つの郡名が記されており、記載形式は異なるものの内容は秋田本Bに同じと思われる。ちなみに川村氏の掲げた写真版を見る限り、熊本本の描写は秋田本A、秋田本B、山口本とともに近似性を感じさせ、

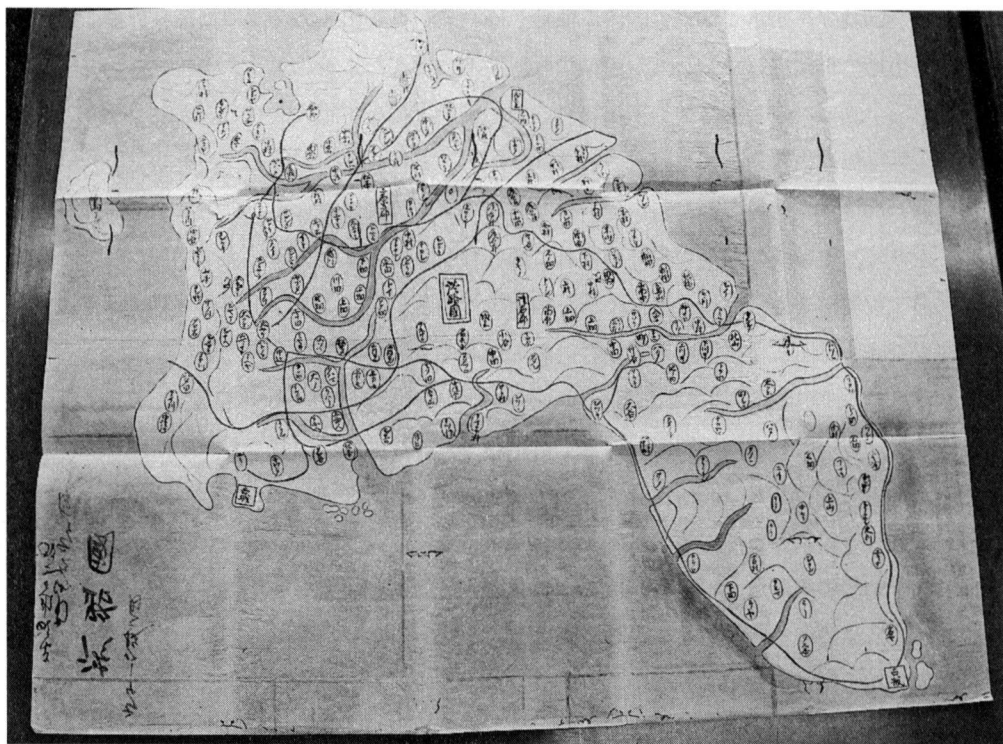


図5

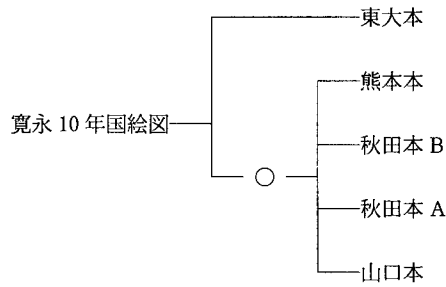


図6 「国々切絵図」各写本の系統（試案）

表5 秋田本の一国石高とその比較

国名	秋田本B	正保石高	元禄郷帳
下総	150,140 石余	444,829 石	568,331.11374 石
武蔵	840,000 石余	982,327 石	1,167,862.98339 石
常陸	752,600 石余	840,048 石	903,778.45800 石

※正保石高は川村博忠氏による（川村 1984, の第19表）。

※北島正元校訂『武蔵田園簿』（近藤出版社, 1977）における武蔵国の正保期一国石高は 982,337.9658 石。

※元禄郷帳は関東近世史研究会編『関東甲豆郷帳』（近藤出版社, 1988）による。

東京大学総合図書館所蔵の絵図（東大本と呼ぶ）はそれらに比べれば詳細な描写をもつ点で、系統を異にするように思われる。本稿でこれまで述べてきた各絵図の特徴を踏まえると、今のところは図6に示したような関係を想定することができる。

なお「国々切絵図」に記載された一国石高につき、先に私が調査した下総、武蔵、常陸の計3カ国分を後の一国石高と比較したのが表5で、明らかに正保期の石高よりも少ないことがわかる。但し、寛永15年国絵図にも一国石高は記載されており、たとえば備前国の石高は280万900石と記載されている（川村博忠 1984a）が、これは正保期高と全く変わらない数字である。寛永期の一国石高は今後一層の分析が必要であろう。

#### 4. 展 望

以上、「国々切絵図」について記載内容と記載形式の両面から検討を加えてきた。その結果を改めて述べれば、記載内容上は寛永10年国絵図の可能性が高く、記載形式の上からも寛永10年国絵図に近いと言えるが、川村氏の言う「縮写図」よりは「略図」と表現するほうがよりの確なように思われる。しかし絵図により記載形式・内容の不統一も見られるので、今回は検討できなかった各写本の成立年代をはじめ今後ともさらなる検討が必要であり、その意味で「国々切絵図」に対する地域史の視点からの研究・活用が今後一層進むことを期待したい〔付記〕。

ここで疑問に思うのは、全国の新しい国絵図が既に完備されている段階の江戸時代前～中期において、なぜ「国々切絵図」は各地で写され、伝来したのか、ということである。日本全体の地形や交通を知るため、幕府でも各藩でも諸国国絵図に対する需要は当時から存在したと思われるから、それに応えるため幕府が各国の略図をある時期に作成したことは考えられる。その際、陸上・海上交通路、難所、川渡しの様子までも詳細に記入させ、軍事上の目的を持っていたと評価されている正保国絵図は、まさに軍事機密として秘匿され、その代替品として改訂前の寛永国絵図が使用されたのではないか。これは前述の「日本図」「日本分形図」の成立事情にも関連するだろう。

ここで想起されるのは、板行国絵図の最初が宝永6年(1709)だったという矢守一彦氏の指摘である(矢守一彦 1977)。板行国絵図については今後の研究に委ねられるべき点が多いが、その成立以前の需要には当然に写本国絵図を用いたと考えられる。諸国国絵図に対する需要が不変のものならば、両者は一つの歴史の流れとして捉えることが可能になり、「国々切絵図」とは異なる時代の諸国写本国絵図の存在も想定できよう。以上はいずれも想像の域を出ないが、今後のための仮説として提示しておきたい。

最後に、本稿への写真掲載にあたっては「国々切絵図」を所蔵する秋田県公文書館及び同館職員の煙山英俊氏と桜庭文雄氏、山口県文書館及び同館職員の山崎一郎氏に特段の御配慮をいただいた。掲載した絵図の一部は茨城県千代川村史編さん室が1998年3月に実施した調査の成果で、同室及び職員の赤井博之氏の御高配をいただき、調査の際は原田信男氏から数々の御教示をいただいた。旧下総国葛飾郡の史料については埼玉県幸手市史編さん室職員の原太平氏に御教示をいただいた。さらに秋田本Aのトレース図作成にあたっては斎藤雅子氏の御協力を得た。いずれも末筆ながらここに記して謝意を表したい。

このほか、明治大学図書館所蔵「日本図」の知見は、同図書館インターネットホームページ(<http://www.lib.meiji.ac.jp/>)に掲げられた画像の閲覧によって得た。同図書館の先駆的な試みに敬意と感謝の意を表するものである。

#### 参考文献

- 阿部真琴 1932「江戸時代の地理学」(上)(下)『歴史地理』394, 395
- 和泉清司 1982「近世初期関東における新田開発」『駿台史学』56
- 川村博忠 1982「寛永期における絵図の調製について」石田寛教授退官記念論文集『地域—その文化と自然』(福武書店)
- 川村博忠 1984a『江戸幕府撰国絵図の研究』(古今書院)
- 川村博忠 1984b「寛永期の作成とみられる防長国絵図」『山口県地方史研究』52
- 川村博忠 1990『国絵図』(吉川弘文館)
- 川村博忠 1995「寛永国絵図の縮写図とみられる『日本六十八州縮写国絵図』」『歴史地理学』176
- 木村 礎編 1988『村落景観の史的研究』(八木書店)
- 黒田日出男 1982「寛永江戸幕府国絵図小考」『史観』107

「日本六十余州国々切絵図」の地域史的考察

黒田日出男 1986「国絵図についての対話」『歴史評論』433

福井 保 1983『江戸幕府編纂物』（雄松堂出版）

丸山雍成 1989『日本近世交通史の研究』（吉川弘文館）

森 朋久 1993「小菅御殿」葛飾区文化財専門調査報告書3『かつしかの道総合調査報告書』（葛飾区教育委員会）

矢守一彦 1977「幕府撰国絵図と板行諸国図」同『古地図への旅』（朝日出版社）

史料集ほか

幸手市教育委員会 1996『幸手市史』近世資料編Ⅰ

高松市歴史資料館 1993『高松市歴史資料館 常設展示図録』

取手市教育委員会 1992『取手市史』通史編Ⅱ

〔付記〕 秋田本Bの郡名記載を見ると、近世に豊田郡を分割して設置された岡田郡の名が見えない。正保国絵図ではその存在が明らかなので、岡田郡の設置は寛永10年～正保元年の間に実施されたと考えることができよう。なお、千葉県野田市立博物館学芸員の猪股寛氏の御教示を得た。